



モロハタマキビ【NT】はワカメの上で生活する殻高5mmほどの微小な巻貝。殻は薄くて半透明。体層が大きくなる。



イボニシは殻高3cmの最も普通に見られる巻貝。殻口は黒味を帯びる。主にマガキを食べる。右上は夏に産まれた卵のう。



コウロエンカワヒバリガイは豪州原産の外来種。殻長は3cm。汽水の入る水質の汚濁した河口域の護岸などにびっしり付着する。ムラサキガイよりも細く小さい。殻はやや薄質。

ムラサキガイは欧州原産の外来種。昭和の初期に船舶について渡来した。殻長は7cmになり、岩壁やブイ、漁網などに足糸で付着し密生する。ヨーロッパではムール貝として食用にされる。近年、コウロエンカワヒバリガイに押されて減少している。

ミドリイガイも熱帯水域原産の外来種。殻長6cmになり、緑色が鮮やか。岩壁などに足糸で付着する。食用になる。



ヒメコザラは大きさ1.5cmほどの小型のカサガイ。内面中央は暗褐色。以前は見られなかった種。



イシダタミは外洋の潮間帯に普通の巻貝。殻高は2.5cm。殻表は石畳状で間違っ種類はいない。

タマキビの色違い



タマキビは殻高は1.5cmのほぼ球形。高潮線付近の岩に多い。乾燥に強く、1～2カ月間水から離しても死なない。写真上のつま先立ちしているのは、温度上昇と乾燥を防ぐ対策。



アラレタマキビは殻高1.1cm。タマキビよりも更に高い飛沫帯の岩の窪みに群生する。時には高潮線より5mも上にいることがある。殻表に顆粒状の螺肋がある。





触手を伸ばしたタテジマイソギンチャク(左)と干出時に触手を縮めた状態(上)。暗緑色の体に十数本のオレンジ色の線があり識別は容易。テトラポッドやカキ殻に普通。



イナザワハベガイは殻高は8mmの巻貝。タテジマイソギンチャクに着生して体液を吸う。夏に俵状の卵塊を産む。



シロスジフジツボ(上)は白い線が明瞭。潮が満ちると右写真のように熊手のような蔓脚を出してプランクトンなどを食べる。かつては汽水域のみに見られたが、沿岸全域の優占種になった。



タテジマフジツボは紫色の線が入る。熱帯海域からの外来種。かつては沿岸部の最優占種であったが、今では非常に少なくなりました。



イワフジツボは高潮線付近に付く8mmほどの小型のフジツボ。長時間の露出によく耐える。



ヨーロッパフジツボは欧州原産の外来種。カキ殻に付くことが多い。楯板には成長線の横縞がある。



クロフジツボの若い個体は富士山型をしていて、殻口が極端に狭い。下から持ち上げるように成長するので、下の方だけ汚れていない。殻板の中は中空の管になっている。



ヨロイイソギンチャクは直径5cmほどになり、体表にあるこぶに砂粒を付けている。触手には緑色やピンク色などの色変異が多い。本来、外洋の磯に見られる種類で、侵入してきた種類。

カキ床の生き物たち

テトラポッドにはマガキがたくさん付着します。死んだマガキの殻の上に更に次のマガキが付着して、複雑極まりない迷路のような空間ができあがります。マガキの間隙は絶好の隠れ家となり、こうした環境を好む多くの生き物が生活しています。



カキウラクチキレモドキは殻高5mmほどの巻貝。マガキの体液を吸う寄生生活をしている。



ウネナシトマヤガイは殻長3.5cm。カキ殻などに足糸で付着している。殻には不明瞭な青紫色の放射帯がある。



イソゴカイは体長10cmほど。体は暗緑色や褐色をしていて、感触鬚は長い。釣りの餌に使われる。



カンザシゴカイの一種はゴカイの仲間だが、石灰質の棲管を作る。中から鰓糸を出してプランクトンを集めて食べる。



多くの個体が複雑に絡み合うマガキ。殻の上に二重三重になることもある。売られているカキと同種だが、ノロウイルスの心配があるので、食べるなら十分な加熱が必要。近年は海的环境変化による餌不足で大きく育たない個体が多い。



トサカギンポは体長7cmほど。写真の個体はまだ小さいが、成長すると雄雌共に頭の上にとさか状の皮弁ができる。頭部には横縞の淡色線が4本ある。



イダテンギンポは体長7cmほど。顔にある2本の淡色線以外は暗黄緑色をしているが、興奮すると体中縞模様になる(写真)。夏にカキ殻の中に産卵し、干出しても雄が卵を守る。



ナベカは体長7.5cmほど。体に数本の暗色横帯があり、胸鰭付近から尾にかけて暗色小斑が散らばる。本種を含め、トサカギンポやイダテンギンポは皮膚呼吸ができ、水が無くても生きていられる特性をもつ。

ヒメケフサイソガニ(右上、右)【NT】は甲幅10mmの小型のカニ。前側縁には2歯がある。ハサミ脚には雄雌ともに軟毛があり、ハサミの先は白く見える。



マキトラノオガニは甲幅15mm。ハサミ脚は左右で大きさが異なる。歩脚には長い軟毛がある。

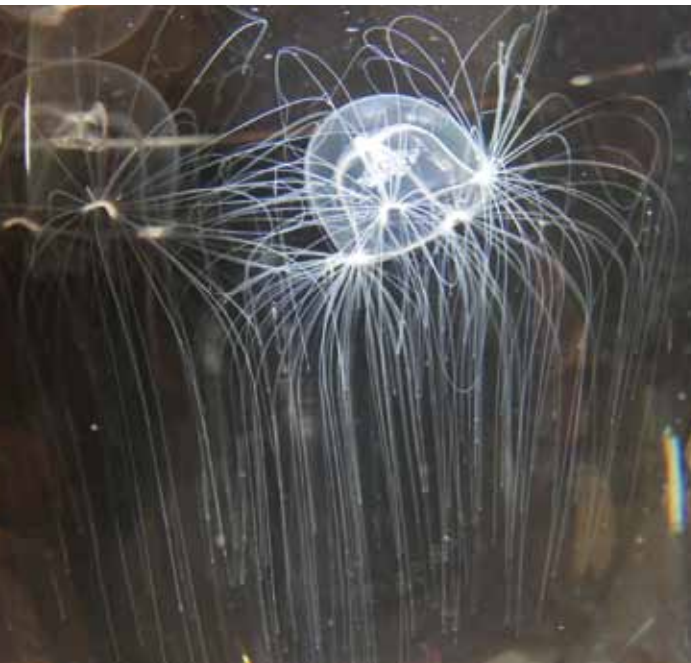


ヒメベンケイガニは甲幅8mmの小さなカニ。よほど注意しないと見つけれない。甲は四角く、前側縁に切れ込みが1つある。全体に軟毛があり、ハサミの先は紫色。



クラゲの仲間

近年では多くの水族館でクラゲを飼育していて、人気者になっています。その優雅な姿は日常生活に疲れた人々の心を癒してくれます。しかし、こうしたクラゲも貧栄養化など海の環境変化により見られなくなる恐れもあります。



ドフラインクラゲは傘の径が2cmほど。傘の4カ所から多数の触手を伸ばす。泳ぐ時(上)は触手が縮み、リラックスすると(左)触手を伸ばす。2～3月に出現する。



チョウクラゲは直径2cmほどの大きさ。テニスボールに割れ目を入れたような形状をしている。体表に櫛板列があり、それを動かして泳ぐ。速く泳ぐ時は、翼状突起をダンボの耳のように動かす。



カミクラゲは傘の径が10cmほどになる中型のクラゲ。髪の毛のような長い触手が多数あることから名づけられた。触手の基部に赤い眼点がある。冬から春に発生する。



ミズクラゲは傘の径が20cmほどになり、花弁のように見える4つの胃が特徴。短い触手が傘の縁に無数に並ぶ。汚れた海では大発生するが、近年では見る機会が少ない。有性生殖をしてプラナ幼生やストロビラ幼生となり、それが無性分裂してエフィラ幼生となる複雑な生活史をする。



ウミクラゲは長さ5cmほどのウリ形で、下は大きな口が開く。体表に数列の櫛板をもち、光に当たると虹色に輝く。ウミタル類や他のクラゲを丸呑みにする。



オワンクラゲは傘の径が20cmになり、春から夏に現れる。傘の縁には短い触手が多数並ぶ。このクラゲから緑色蛍光タンパク質が単離され、ノーベル賞を受賞して有名になった。



カラカサクラゲは半球状の傘から長い口柄が突出する。触手は8本あるが、4本が発達する。



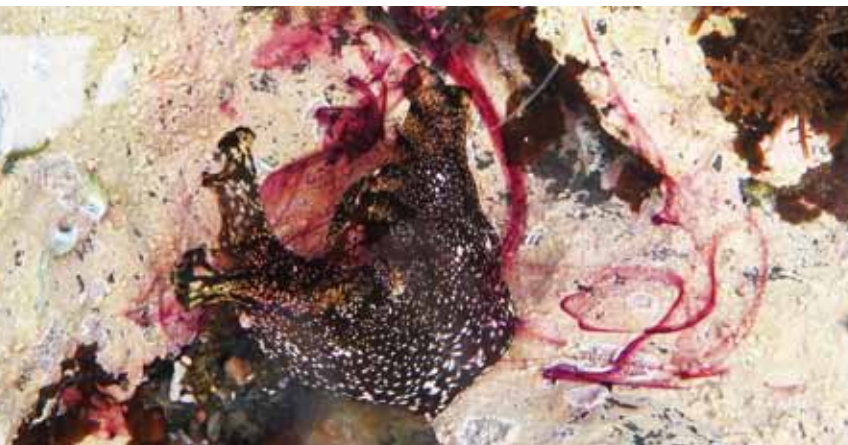
アカクラゲは傘にある16本の赤褐色の帯が特徴。傘の上に見える赤い触手は40本ある。強い刺胞毒を持つので、たとえ死んでいても触ってはいけない。この個体は特に大きく、リボン状の口腕は1.5mあった。

ウミウシの仲間

ウミウシの仲間は軟体動物に属し、海産の巻貝が殻をもたない方向に進化した生き物です。実に多彩な色や形をしていて、日本近海だけでも1400種以上いると言われています。ウミウシは毒性のある粘液や刺胞動物から奪った刺胞で武装しており、派手な色彩は警戒色になっています。アメフラシなどを除くと小さな種類が多いので、注意深く探す必要があります。



アマクサアメフラシは体長12cmになる。体色はさまざまで、暗褐色で網目模様があり、その上に灰白色か黒色の斑紋のあるタイプや写真のように褐色に斑紋の無いタイプもある。腹足の後部に吸盤があり、側足が立ち上がる。



アメフラシは巨大になり、40cm近くまで成長するが一年生。海藻をかじり取って食べる。本種は刺激を受けると、アプリシオプルプリンという紫色の液を出す。これは毒ではないが、身を守る手段。黄色い卵塊は「海そうめん」と呼ばれる。地方によっては食用にする。



クロシタナシウミウシは体長7cm。体は平滑で柔らかく黒色。縁辺は波打つ。背面は黄色線や暗赤色線で縁どられる。浅場において動きは活発。



チドリミドリガイ科の一種は全長12mm。海水が入る養魚池のカキ殻の上にいた。



フジエラミノウミウシは全長15mm。黄色から橙色の体に、触角や背側突起は青色や紫色を帯びる。漂着した海藻に付着していた。



ドーリス科の一種は全長3cmほど。種類によっては角のような2つの触角がある。



ツノワミノウミウシは全長15mm。体は半透明の白色。背側突起はやや長く、ゆるく湾曲している。漂着した海藻に付着していた。



キセワタガイ属の一種は体長25mm。砂質干潟にいて、小型の貝類を丸呑みにする。内部に白く薄い殻がある。



ウミフクロウは体長11cmになる。黄灰色の体に暗紫色の不規則な網目模様がある。右側縁に大きな櫛状の鰓がある。殻はもたない。干潟から深い海まで生息する。夜行性で、動物質のものは何でも食べる。



三田町の埋立地の景観。土砂に貝が混じる。丸い貝はウラカガミ【EN】。



二枚の殻が合わさっているアカガイ。これは浚渫時には貝が生きていた証拠。

深場の貝類

四日市港は大型船が入港できるように、14mの水深があります。そこには沿岸部や干潟と全く異なる種類の貝類が生息しています。しかし、港湾なので潜水して調べることもできない神秘の世界なのです。水深確保のための浚渫工事が行われた時のみ、貝たちは姿を現します。



左から、イヨスダレ、ウラカガミ、ゴイサギ。四日市港では比較的個体数が多い。



浅場に生息するツメタガイに代って、深場ではこのハナツメタが多くなる。



左から、シロコニクタケ、ヤスリギリ。



左から、ヤカドツノガイ、ツノガイ。八角の意味だが、変異がある。



左から、キンチャクガイ、ネズミノテ、イソチドリ【EN】。



左から、ハナムシロ、アラレガイ、ムシロガイ【NT】。



ウミタケ【EN】は主に有明海に生息する。



左から、テングニシ【NT】、ヤツシロガイ。



左から、クダマキガイ、モミジボラ、ノボリガイ。



左から、ハブタエスソキレ、テンガイ、オオツカテンガイ。



左から、ヘソワゴマ、ハナゴショグルマ、チリメンヒメカタベ。



左から、コンゴウボラ、トクサバイ。



アオサギガイは殻長4cm。細砂泥底に生息する。



アサジガイは殻長4cm。珍しい種類。

左から、クモリザクラ、ウズザクラ【NT】。



ヒメカノコアサリは殻長8mm。個体数は多い。





左のフクレユキミノの生体は、赤く細長い外套膜触手^{がいとうまく}を動かして泳ぐ。中はハネガイ、右のフミガイは放射肋が15本あり、砂泥底にすむ。



アメガイは殻高4cm。珍しい種類。



殻高が21cmもある巨大なアカニシ。ここまで成長するには十数年は生きたと思われる。四日市港の海底は、貧酸素水塊に占められた死の環境ではなく、意外にも貝にとって良好な場所かもしれない。



左から、セコボラ、ホタルガイ。



左から、ハチミツガイ、シラスナガイ。



ツキガイモドキは殻高3.5cmのほぼ円形。内湾の泥底にすむ。



アミメザクラは放射肋と成長肋が交わる。珍しい種類。



ヒメキリガイダマシは殻高2cm。各層の上下は褐色を帯びている。



このアカガイも十年以上は生きている。普通は殻長7cm程度。放射肋は42本あり、高級な食材。体液はヘモグロビンを含み赤い。



オオモモノハナ【NT】は殻長3cm。殻は暗いピンク色のものが多く、白色の個体もある。



シオサザナミは前部と後部で彫刻が異なる。



ダイミョウガイは殻長5.5cm。



左からクダタマガイ、マメウラシマ。



左から、ツクシフタナシシャジク、ヌノメツブ、ツクシガイ、ベニフデ。



ツグチガイは殻高2cm。イソバナ類につく。殻の色は変異がある。



左から、アワジチヒロ、ヒナノヒオウギ、タジマニシキ、ヒヨクガイ。



左からキサゴ、イボキサゴ【CR】、キサゴモドキ。



左から、スダレモシオ、ハナガイ。

左から、アズマニシキ、ニシキガイ。



台風後に打ち上げられた、大量のマテガイやバカガイなどの漂着物。

思いがけない出会い 漂着物

浜辺を散歩すると、様々な物が打ち上げられています。その多くは、近くの海に分布する貝類や海藻です。ところが、台風で海が荒れた後などには、伊勢湾の深い場所に生息する珍しい生き物が打ち上げられることもあります。また、近年では海的环境変化に伴い、今まで見られなかった外洋性の種類も増えてきています。



ヒラカモジガイは殻長8cmほどの細長い二枚貝。浅海の細砂底にすむ。殻は反っていて完全に合わさらない。珍しい種類。



カガミガイは殻長7cm。細かな砂に深く潜っている。食用になる。



ネコガイ【NT】は殻高2.8cmあり、やや深場の砂泥底に潜入している。白い軟体部が殻を覆っている。



ムラサキガイ【VU】は殻長12cmになる大型の二枚貝。一時期まったく姿を消したが、近年は時々見かける。



シマメノウフネガイは殻長3.5cm。北米から帰化した。アカニシなどの貝に付着して、宿主の排泄物を餌とする。



カリガネエガイは殻長5cmになり、内湾に見られる。



オキナガイ【NT】は殻長5.5cmになり、深場の細砂底にいる。殻は光沢があるが、薄く壊れやすい。2014年6月にたくさん打ちあがったが、それ以降見ていない。



ヤチヨノハナガイ【EN】は殻長5cmで、泥底にすむ。オキナガイと同様、2014年以降は見られない。



オリレボラ【VU】は殻高2.2cmで、深場の泥底にすむ。市域ではほとんど見られない。



ツヤガラスは成長すると殻長8cmになる。過去にはいなかったが、海的环境変化に伴い、新たに見られるようになった。

トリガイは殻長9cmになり、寿司ネタにされるが、近年は少ない。



サクラガイ【NT】は殻長3cm。やや深場の泥底にすむ。ピンク色がかわいいので拾われることも多いが、近年は少ない。



コロモガイ(上)は殻高5cmになり、やや深場の砂泥底に生息する。縦肋は肩で尖る。ふたは無い。左は卵のう。



フジノハナガイ【NT】は殻長1.3cm。外洋に面した砂浜に生息し、波に乗って移動する習性がある。



オオシノミガイ【VU】は殻高1.2cm。外洋に面した浅海に生息する。



カズラガイは殻高7.5cm。外洋に面した砂底に生息する。海環境変化に伴い、新たに見られるようになった。



シゲトウボラは殻高7cm。県内では採集例が少ない。



タイラギ【NT】は殻高が28cmもある巨大な二枚貝。殻頂が泥底に突き刺さったように生活している。食用となり、貝柱を刺身にするが、身もおいしい。近年激減している。



ナミマガシワは殻長4cmの岩に付着する二枚貝。写真は全て左殻。白、黄、オレンジ、ピンクと色変異があり、艶がある。



シナハマグリは殻長9cmになり、蓄養場から逃げ出したものが南五味塚の海に生息する。原産地は、中国、朝鮮半島。



シノマキは殻高8cmになり、外洋に面した岩礁にすむ。写真は幼貝。過去には見られなかった種類。

シドロガイの成貝(右列)と幼貝(左列)。殻高6cmになり、砂地の海底にすむ。幼貝は殻口が張り出さないで別種に見える。



レイシガイは殻高4cm。イボニシに似るが殻口が黄色。潮間帯の岩礁にすみ、近年増加傾向。



クシケマスオ【NT】は殻長2cm。細かい放射肋がある。



キヌガサガイは殻径8cmほどになる。水深20m以上の深場に生息するので浜に打ち上がることは稀。幼貝は殻に石を付ける。



ウチムラサキ【VU】は殻長8.5cm。一般にはオオアサリの名前で売られているが小型化している。泥底にすむので減少傾向。



アリソガイ【EN】は殻長12cmになり、外洋に面した砂底にすむ。バカガイに似るが、殻頂部は紫色を帯びる。





ツメタガイの卵塊は、底の無い茶碗を伏せた形から砂茶碗と呼ばれる。(生体はP15)



ツメタガイに食害された貝類。左上から時計回りに、コロモガイ、サルボウ、アサリ、シオフキ、ヒメシラトリ。



ツメタガイに食べられたマテガイ。他の貝がいなくなったので、動きが早く捕食しにくいマテガイまで食べるようになったと推測される。



イタボガキ【CR】は水深10mほどの岩に付着し殻長10cmを越える。右殻は栓皮蓋^{ふた}状になる。左殻は放射肋のみで突起物がある。



ナミガイは殻長12cmになり、深場の細砂底にすむ。シロミルの名称で売られていることがあり、太く長い水管は刺身になる。近年はほとんど目にしない。



ホトトギスガイは殻長2cm。弧状の斑紋が鳥のホトトギスに似ている。



チョウセンハマグリは殻長8cm。本来、外洋性の砂浜に生息する在来種。



この不思議な形の物体は、アカニシの卵のう。ナギナタホオズキとも呼ばれる。(生体はP57)



ハイガイは殻長4cmになり、泥底にすむ。肋数は18と少ない。伊勢湾では既に絶滅している可能性もある。



トリガイの殻に付いたサンカクフジツボ。殻径は1.5cm。殻口は小さく三角形。



クチベニガイは殻長2.5cmあり、外洋の砂浜に生息する。殻は厚く、右殻は左殻より大きく抱えている。殻の内面の腹縁は紅色で美しい。



エゾタマガイは殻高4cm。臍孔はほとんど塞がれる。他の貝を穿孔して食べる。



コウイカの一種の甲。長さは30cmもありとても大きい。軟体動物なので貝の殻に当たる。下端に針状突起が突出せず、種類は分からない。



オニグルミの種子(上)、ウスカワマイマイ(右)、ドングリ(下)のように陸にあるものが川の流れて運ばれてきて、海岸に漂着するものも多い。



シロバヤは体長6cmほど。原素動物の仲間。食用になるマボヤに近縁。カキやアコヤガイの養殖いかだに付着して被害を与えることがある。



イボイチョウガニは甲幅5cm。深場に生息する。前側縁には大小の歯が交互になっている。



キンセンガニは甲幅4cm。砂地に生息する。歩脚の先は平たくなっていて、砂に潜るのに適している。



テナガゴブシは甲幅3cm。深場の砂地にすむ。成長した雄のはさみ脚は非常に長い。



サメハダヘイケは甲幅3cm。甲には小顆粒しょうかりゅうがあり、人の顔に見える。最後の2対の脚は短く、貝殻を背負う。



トゲが取れたサンショウウニ(左上)とオカメブンブク(左下)。右はハスノハカシパンで、3種とも棘皮動物の仲間。



ホソウデヒシガニは甲幅5cmあり、深場の砂底にすむ。甲は菱形で、はさみ脚は非常に長く、いぼ状の突起がある。



シリヤケイカは外套長18cmになるコウイカの仲間。写真は甲で、下端に突起が無い。



ジャノメガザミは甲の3紋が特徴。ガザミが増えたのに反し、近年ほとんど姿を見ない。



アカエイ(生体はP62)の脊椎骨。エイやサメの仲間は軟骨魚類なので、一般の魚類の脊椎骨とはかなり雰囲気が違う。



ビーチグラスは、割れた酒瓶などの破片が波で削られ丸くなったもの。人工物だが、意外と人気がある。



ヒトデは黄色や紫色の色変異がある。貝類に被害を与える。冷水性の種なので、近年はあまり見かけない。

プラスチック原料のレジンペレットは、大きさが3mmほどで気づきにくい、たくさん漂着している。



南方からの贈り物

伊良湖岬に流れつく椰子の実^{やし}は歌になって有名ですが、同様に四日市にも黒潮に乗って南方から漂着する物があります。出所は様々で、紀伊半島、四国、九州、奄美、沖縄、台湾、フィリピン、ミクロネシアなどがあります。



カルエボシは全長3cmほど。殻板の縁はオレンジ色で、放射状の条線がある。カメノテやフジツボに近い節足動物の仲間に属し、外洋の浮遊物に着生する。



ギンカクラゲは円盤部の直径が3cm。青い感触体を周囲に伸ばし、外洋を大群で浮遊生活している。



モダマの一種エンタダリーディはマメ科の数十mになるツル植物。果実は0.5～1mになる。種子(左)は直径4cm。



ワニグチモダマはモダマに似るが、より平たく小さい。



カツオノエボシは外洋を浮遊するクラゲの仲間。数mになる長い触手を持ち、刺胞毒は強い。10cmほどの気胞体の中は一酸化炭素。



ココヤシの果実は25cmほどあり、漂着種子としては格段に大きい。中にはココナッツミルクが入っている。



モモタマナは東南アジアの海岸に生育する半落葉高木。種子の胚は脂肪分が多く、焼いて食べられる。



火山噴出物の軽石は水に浮くので遠方から運ばれる。一番近いと考えられる火山は桜島。



シロシュモクザメはハンマーのような頭部が特徴。眼はその両端にある。体長は1mを越え、広く温帯域から熱帯域に生息する。幸運でないとなかなか出会えない。



ルリガイは殻高4cm。粘液で浮嚢(上、透明)を作り、その下にピンク色の卵嚢を産む。外洋を浮遊生活し、ギンカクラゲを餌とする。



ゴバンノアシの果実は碁盤の足に似ている。石垣島以南の東南アジアの海岸に生育する。種子には麻酔性の毒がある。



クロホシマンジュウダイの幼魚。全長は13mm。鰭を小刻みに動かし、後退したり体を傾けて、落ち葉に擬態している。成魚は熱帯域に生息し、50cmにもなる。



オオミフクラギは東南アジアに産するキョウチクトウ科の植物。写真は中果皮の繊維。このような珍品の正体が分かれば楽しい。



ハンボンミズナギドリは全長42cmあり、オーストラリア南東部のタスマニア島周辺が繁殖地。主要な餌はオキアミ。越冬するベーリング海に向けて北上する何万羽という大群が、5月に日本付近を通過する。一部は伊勢湾に入り込み、悪天候に遭遇すると大量死する。ほとんどは幼鳥で、死因は餓死。



ハシボソガラスが浜に残されたオキシジミを上空からアスファルトの上に落として割って食べた跡。



ミユビシギとハマシギの足跡くちばしの跡。この時は砂浜に打ち上がったケンミジンコを食べていた。



干潟に残るミシシippアカミミガメの足跡。尾を引きずった跡が残らない。

助走から飛び立つセグロカモメの足跡。水かきの跡が残らず、体が浮き上がると突然消える。歩いている時(下)とは形状が異なる。



シロチドリの足跡は、左、右、左、右と違う方向を向くので、酔った時に使われる「千鳥足」の語源にもなっている。



ウラジロアカザを食べたヌートリアの食痕。切り口が鋭い。



ミサゴのお気に入りの止まり場と白い液状の大量のフン。常に海向きに止まっているのが分かる。



海辺のフィールドサイン

海辺にもさまざまな動物のフィールドサインがあります。砂浜や干潟では足跡などが残りやすいので、どんな動物の仕業か推測するのも楽しいものです。



イソガニの殻を多く含んだ5cmもあるセグロカモメのペリット(鳥が口から吐き出す不消化物の固まり)。



マテガイの殻を含むユリカモメのペリット。マテガイのように鋭い貝を丸ごと食べて大丈夫なのかと心配になる。



カワウの足跡は、全体的に大きく、外趾がいしが内趾よりかなり長いので分かりやすい。



シャリンバイの実を食べたイソヒヨドリのフン。



カラスに食べられたハマガニの殻。ハマガニが特に多いのは、捕食し易いからだと思われる。

砂浜に残るセグロカモメ(大)とシロチドリ(小)の足跡。中央を手前から奥に歩くのはハシボソガラスの足跡。

三重県の鳥 シロチドリ

1972年、県民投票によりシロチドリ【繁殖CR 越冬NT】は三重県の鳥に選ばれました。これには、シロチドリの本来の繁殖地である自然海岸を保全することで、三重県の自然を守ろうという意味合いがありました。1990年代には、埋立地でコアシサシと共にコロニーを形成して、繁殖に大成功した年もありましたが、現在では鈴鹿川派川河口や吉崎海岸で2～3番が繁殖するだけとなってしまいました。

シロチドリは一年中見られるので留鳥と思われがちですが、標識調査の結果より、千葉県で繁殖した個体が三重県で越冬し、熊本県で越冬した個体が三重県で繁殖した事例があるので、季節移動をする漂鳥と言うことができます。



シロチドリは全長は16cmあり、胸の黒帯は雄も雌も切れる。写真は鈴鹿川河口の砂浜で抱卵する雄。雄も雌も交代で抱卵する。



三田町の埋立地に作られたシロチドリの巣。水はけが悪い場所では、貝殻などを集めて少しでもかさ上げをする。

砂の窪みに無造作に産まれた卵。普通3卵を産む。抱卵期間は3週間以上かかる。地表の卵には危険がいっぱいで、カラスやドブネズミなどの天敵や人による踏み潰しもある。また、釣り人が巣から半径50m以内に居座った場合、親鳥が帰巢できなくなり、直射日光にさらされると卵が死滅する。4～7月の繁殖期には繁殖地に立ち入ってはいけない。



巣の近くを警戒する雌の成鳥。雄のように後頭部の茶色は目立たない。



孵化したてのシロチドリの雛。孵化後2時間もすると自力で走り出す。危険が近づいて親鳥が警戒声を出すと、漂着ゴミの下などに伏せて動かなくなる。



孵化後、約半月を経過してだいぶ大きくなった雛。トビムシやゴカイ、クモなどの動物質のものを食べる。飛べるようになるには、更に半月以上かかる。産卵された卵の数に対して、無事に育つ個体は1割前後しかない。



人が雛に近づいたために擬傷する雌親。翼をばたつかせ、ビービーと鳴いて人を雛から遠ざけようとする。

冬期に砂浜の窪みに入って休憩する群れ。過去には100羽以上の群れが普通に見られたが、現在は生息環境の変化により、鈴鹿川本川河口には全く入らず、派川河口で数羽程度が越冬するのみになってしまった。



※特別な許可を得て撮影しています。

消えたコアジサシのコロニー

コアジサシ【CR】のキリッ キリッという声は、伊勢湾に春の訪れを感じさせる懐かしい風物詩でした。しかし、数haもの広大な裸地に大コロニーを形成して繁殖するという習性が仇^{あだ}となり、市域では2005年の霞北埠頭1200巢、2008年の三田町1500巢を最後に繁殖は成功していません。



コアジサシの卵には不規則な黒斑がある。普通2〜3卵を産む。



孵化当日の雛。孵化は通常6月上旬と6月下旬の2つのピークがある。



羽毛が黄色いタイプの、孵化後5日目の中雛。まるでぬいぐるみのよう。



もう飛べる寸前まで成長したコアジサシの雛。孵化から飛べるようになるのは、餌の状態にもよるが18日前後と早い。



コアジサシは全長25cmほどあり、雌雄同色だが雄の方が尾羽が少し長い。夏鳥として4月中旬に渡来し、9月下旬に幼鳥と共に大群で渡去する。越冬地は7000km以上離れたオーストラリア。意外に長寿で、18年生存した記録がある。



造成地で抱卵する成鳥。



侵入者に対して一直線に攻撃を仕掛ける成鳥。チュウビのような天敵が侵入すると、一斉に飛び立ちモビングする。30巢程度の小コロニーでは防御力が弱く、全滅させられる場合が多い。



雛に小魚を給餌する成鳥。餌は沿岸の海上を親鳥がホバリングしながらダイビングして捕える。餌の種類はトウゴロウイワシ、カタクチイワシ、ボラの子ハクなど。雛の大きさに合わせて餌の大きさを選ぶ。



2008年の三田町のコロニーでは、コアジサシに混じって10巢のベニアジサシ(上 抱卵中の成鳥、下 孵化当日の雛と卵)が繁殖した。本種は本来南西諸島で繁殖するが、北上傾向にあり、本州では大阪府に次いで二番目の繁殖記録となった。

シギ・チドリの仲間

シギ・チドリ^{くちばし}の仲間は嘴や足が長く、嘴の形も様々なのでファンの多い人気の野鳥です。ほとんどの種類は旅鳥として春と秋の渡りの時期にだけ見られます。海の貧栄養化などの環境変化は、これらの種にも少なからず、深刻な影響を及ぼしています。



アオアシシギの成鳥夏羽。全長は32cmあり、足は灰緑黄色。キュンキュンとよく通る声で鳴き、主に小魚や甲殻類を食べる。一部の個体は越冬する。渡来数は多くない。



イソシギは全長20cmほど。ほぼ一年中見られるが8月頃に多い。ソーチャーチャーと鳴き、水面すれすれを飛ぶ。本州中部以北では繁殖する。



トウネンの成鳥夏羽(上)と幼鳥(右)。全長15cmと小柄なシギ。群れをつくることが多く、チュリツと鳴く。秋の渡りで渡来するのはほとんどが幼鳥。



泥の中に頭まで突っ込むオオソリハシギの幼鳥。思わず笑ってしまうそうになるが、餌を捕ることは命に係わり、真剣そのもの。

オオソリハシギの雄成鳥夏羽(左上)と成鳥冬羽(左下)。全長38cmあり、やや上に反った長い嘴が特徴。ケツケツと鳴く。干潟でゴカイや貝を食べる。年々見る機会は減っている。



オオメダイチドリは全長24cm。メダイチドリに似るが、嘴が少し長い程度の差異なので注意深く観察しないと見落としてしまう。写真は幼鳥。



キアシシギの成鳥夏羽。全長は25cmあり、カニなどの甲殻類を好む。ピューイーと鳴く声は季節を感じる。以前は100羽単位の群れも渡来したが、今では激減している。



チュウシャクシギの成鳥^{くちばし}。全長は42cmあり、嘴は下に反る。カニ類を好み、ハサミや脚を落として食べる。ホイピピピピピと鳴く声は、伊勢湾の音風景とも言える。本種も減少が著しい。



キアシシギの幼鳥(上)とサルハマシギの幼鳥(下)。秋の渡りではキアシシギの幼鳥は、成鳥と渡りのルートが異なるのか、ほとんど渡来しない。初めての渡りで、1万kmもの長旅を親鳥の先導もなく飛ぶ幼鳥たちの能力には感心させられる。



サルハマシギの成鳥夏羽。全長21cm。嘴は少し下に反る。冬羽や幼鳥はハマシギの冬羽に似るので注意が必要。貝類やゴカイ類などを食べる。市域への渡来は稀。



ハウロクシギ【NT】は非常に長い下に反った嘴が特徴。全長62cm。体の下面は下尾筒まで褐色斑がある。ピョーインピョピョなどと鳴く。



ダイシャクシギ【VU】は全長58cm。下尾筒や腰は白い。ヤマトオサガニなどのカニ類を好む。ホーイーンと鳴く。名古屋市の藤前干潟では一部の個体が越冬する。市域への渡来は稀。



ソリハシギの成鳥冬羽。全長は23cm。やや上に反った嘴が特徴。嘴は硬質ゴムのように弾力性がある。カニを好んで食べる。ピィピィピィと鳴く。



キョウジョシギの雄成鳥夏羽。全長22cm。雌成鳥夏羽では頭部が褐色。漂着物の海藻などを嘴でひっくり返しなが甲殻類や昆虫などを食べる。ゲレゲレと鳴く。



ミヤコドリ【NT】は全長45cm。キュリーツと強く鳴く。40年ほど前までは珍鳥であったが、その後渡来数が増えた。本種は嘴の力が強く、深い所にいるイソシジミを食べることができる(上)のが増加の要因だが、イソシジミの減少により近年数は減っている。



ハマシギの成鳥夏羽から冬羽への換羽中(左上)と成鳥夏羽(左)。全長は20cm。ヨコエビ類や貝、ゴカイなどを食べる。本種は冬鳥として大群で渡来し、飛ぶとハマシギ玉(上)を作るので有名。かつて鈴鹿川本川河口に1200羽もの群れが見られたが、現在は派川河口で数羽を確認するのがやっとの状態。



ミユビシギ【VU】の成鳥夏羽(右上)とレッグフラッグが付いた成鳥夏羽から冬羽への換羽中(上)。全長は20cm。上の個体はオーストラリアで放鳥されている。近年減少が著しい。

セイタカシギ【CR】の雄成鳥夏羽。全長は37cmあり、長く赤い足が特徴。ピューイッやキツと鳴く。過去に霞の埋立地で繁殖した記録がある。



ムナグロの成鳥冬羽はダイゼンの冬羽に似るが、全長は24cmとやや小さい。楠町では年により一部の個体が越冬する。(夏羽は第2集P40)

コラム

シギの体重が意味するもの

スズメのような小鳥類の場合、体重の偏差は平均値±10%程度の範囲です。しかし、キアシシギの場合は平均体重125.2g【N※=175】に対し、最低体重72g、最高体重174g。トウネンの場合は平均体重35.9g【N=120】に対し、最低体重19g、最高体重45gと倍以上の差があります。この差は脂肪量の差で、シギ類は皮下脂肪をたっぷりと蓄えて、それを消費しながら数千kmの海上を一気に渡るのです。体重を増やせなかった個体は渡りの途中で力尽きてしまいます。もし、渡りのルートを間違えて日本に渡来したシギの多くが餌不足で死ぬとしたら、何と恐ろしい構図でしょう。※Nは計測個体数。



ダイゼンの成鳥夏羽(左)と幼鳥(上)。全長は29cm。雌雄同色。白と黒が鮮やかな夏羽に出会う機会は多くない。主にゴカイ類を食べる。ピューイと鳴く。一部の個体は越冬する。



オバシギの成鳥夏羽。全長は27cm。雌雄同色。胸は黒帯のようになり、肩羽だけに赤褐色の斑紋が入る。夏羽に出会う機会は多くない。



オバシギの幼鳥。上面の軸斑が黒褐色で羽縁は白い。胸には黒褐色斑が密にある。ケツ ケツなどと鳴く。コオバシギと混群をつくることがある。

コオバシギの幼鳥。全長は25cm。右のオバシギ幼鳥に似るが、翼のコントラストが弱く、サブターミナルバンド(羽縁のすぐ内側の暗線)がある。



メダイチドリの成鳥夏羽。全長は20cm。ゴカイ類を好んで食べる。動きは他のチドリ類よりも緩慢。冬羽には赤味がなく、シロチドリに似るがやや大きい。



アカアシシギ【VU】の成鳥夏羽(上)と冬羽から夏羽への換羽中(右)。全長は27cmあり、嘴の根元と足が鮮やかな赤色。飛ぶと次列風切と腰の白色が目立つ。ピューオなどと鳴く。国内では北海道北東部で繁殖する。渡来数は多くない。



ソリハシセイタカシギの第1回冬羽。全長は45cmと手前のマガモと比べてもかなり大きいことが分かる。全国的な珍鳥。嘴の反った部分を水中に入れ、左右に振りながら餌を取る。とても落ち着いた動きをする。



キリアイは全長17cm。肩斑と頭側線が繋がり、V字状になるのが特徴。ビュールなどと鳴く。写真は幼鳥。渡来数は少ない。
※特別な許可を得て、捕獲・撮影しています。

カモメの仲間

冬の海岸はカモメたちで賑わいます。比較的近くで観察できますが、近似種の識別にはかなりの経験が必要です。カモメ類も減少傾向は否めず、今では楠町にあるハマグリ蓄養場の死んだ貝や魚のアラに餌を依存している状況です。



夕方、海上のねぐらに向けて飛び立ったユリカモメの群れ(上)。左はユリカモメの成鳥冬羽、右上は第1回冬羽、右は成鳥夏羽。本種は全長38cmほどで、8月から渡来し、5月上旬まで滞在する。北上を始める3~4月は群れが大きくなる。かつては数千羽の群れが見られたが、近年では精々500羽程度。四日市市の鳥に指定されている。



ズグロカモメ【CR】の成鳥冬羽(左)と第1回冬羽(右)。世界的にも個体数の少ない種類で、主に西日本へ渡来する。全長は32cmとユリカモメより少し小さいが、群れの中では見つけにくい。嘴は黒く太短い。本種を探すには、キュツやキツと鳴く声を覚えるのが近道。また、干潟の上空数mを1羽だけで飛んでカニ類を探すという習性も手掛かりになる。



シロカモメの第2回冬羽。全長70cmほどの大型のカモメ。初列風切は白い。キューキューとセグロカモメよりゆっくりとしたテンポで鳴く。極北部で繁殖し、主に北日本に渡来する。市域では非常に稀。



風に乗って飛翔するカモメの成鳥冬羽。成鳥では尾羽の白さが際立つが、第1回冬羽ではウミネコのように尾羽に黒帯がある。初列風切にある大きな白斑をミラーという。